

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

=====

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

=====

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.106『支援者養成研修への提案 5』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 △ お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止

2. 支援ノートNo.106『支援者養成研修への提案 5』

支援ノートNo.102から連続して書いている『強度行動障害支援者養成研修』への問題提起も、今回で5回目となりました。この、公に行われている報酬加算対象の研修は、「特性確認シート」というものを軸にして進められています。これがどのようなものかについては、直近の4回に亘る支援ノートに書かれていますので、そちらをご覧ください。今しばらくの間、ホームページ上に置いておきますが、いずれは削除しますので、興味のある方は早めに確認されたほうがよろしいかと思えます。

なお、『支援者養成研修への提案』は、今回の5回目を最終回とします。まとめの意味も加わりますので長い文章になってしまいますが、最後ですのでお付き合いください。

これまで、「社会性」「コミュニケーション」「想像力」と、当該研修で使われているシートにあげられている順番に進んできて、今回は最後の「感覚」についての問題提起になります。

● 単純化された「感覚」モデル

「感覚」については、自閉スペクトラム症を理解する概念としてよく用いられる「ウイングの三つ組」(Lorna Wing 1981)に含まれていないと思いますが、1980年代に研究が盛んになり、次第に論文が出はじめた分野です。DSM-5には「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味(例：痛みや体温に無関心のように見える、特定の音、感覚に逆の反応をする、対象を過度に嗅いだり触れたりする、

光または動きを見ることに熱中する)」と記されています。確かに、骨折しているのに涼しい顔をして風呂に入っている人などと会うことは多く、それが生活するのに不自由なレベルにまで達している人と、そうでない人とがいるものの、一つの特徴でしょう。

特性確認シートでは、これらのことを「感覚が過敏または鈍感」と解説し、聴覚、視覚、触覚、嗅覚、味覚、前庭覚について、それぞれ過敏や鈍麻があると説明されています。そして、支援のアイデアについては、①苦手な刺激を少なくするための配慮をする（場所の視点）②好きな刺激、必要な刺激は保障する（場所の視点）といった具合に、2つのアイデアがあげられています。そして、これらの説明は、実際に現場で出逢う多彩さと比較して、もはや原形をとどめていないほど単純化しており、なにか騙されたような気分になります。

● 全人的苦痛と必要な刺激

まずここで疑問に思うのは、なぜこの2つのアイデアが「場所の視点」に属するのかです。刺激＝場所という短絡的な考え方が、現場にどのような形で浸透しているのかを考えると、研修での伝え方には相当気をつけなければいけないだろうと思うのです。この研修を受けた支援者たちが、現場で何をしているかという、アイデアとしてあげられている①ばかりに熱中し、②の中にある「必要な刺激」について、本人の側に立って想像することを全くせずに、安穩と過ごしているのです。当然、必要な刺激を保障することなどできていません。理由は単純で、必要な刺激について考えようとする、相手の全人的苦痛について考え、応援しなければならなくなり、大変そうだからです。あるいは、相手に全人的苦痛というものがあるという想像すらできない技能レベルだからです。全人的苦痛とは、「身体的苦痛」「社会的苦痛」「精神的苦痛」「絆の喪失感からくる苦痛」をトータルでとらえた概念で、これについては、気付かぬふりをしてスルーしたほうが楽に給料をもらえます。スルーされたほうは、たまったもんじゃありません。人生を破綻に追い込まれるほどの二次的苦痛を強いられるわけで、実際そういった例が後を絶ちません。全人的苦痛のうち、「社会的苦痛」「精神的苦痛」「絆の喪失感からくる苦痛」の3つは、刺激を失うことによって発生する二次的苦痛です。そして、多くの支援者はこれを一次的苦痛と混ぜ返しており、自分がそこに追い込んでいるという反省は1ミリもありません。そうなる原因の一つがこの研修です。

研修を企画した側が何と言おうとも、研修を受けた支援者は、お墨付きをもらった方法を使っているという意識を持っています。しかし、この研修においては「必要な刺激」（ニーズ）についての考察が浅く、事例も乏しいため、支援者は相手のデマンドしか見ていないという自覚に至らず、反省することはありません。例えばそれは、「必要な刺激」ではなく「好きな刺激」であることが多く、「必要な」というのは、「トイレへ行く」などのADLに関するものくらいしか、この研修には出てきません。ひとや社会との関わりといった質感のあるものを必要な刺激として考え、それをどう保障するかというアイデアは出てこないため、受講者にその意識を持たせることはできないのです。従って、受講した支援者の大半は、ひととして大切なことが欠損した意識を持って、日常の勤務に戻ることになるのです。

意識に欠損を見出すことができるのは観察者（他人）であって、欠損している支援者で

はありません。当該支援者にとって意識できることは、常に意識できていることだけであり、意識できないことは常に意識できないのです。従って、本来研修とは受講者に意識できていないことのうち大切なことを意識させる観察者としての役割を果たさなければいけません。現状の研修がその役割を果たしているのかどうかを考えると、僕は絶望的な気分になります。

感覚に関連する課題解決のアイデアを「場所の視点」のみで考えてしまうと、そうなるに決まっています。もっとも、この研修を実施する側の人々が、本気で「場所の視点」だと考えていて、「関係性の視点」を持っていないのであれば、事態は深刻です。そう考えると、そのようにも思えてきて、不安になってしまいます。

● ところが痩せる

先月の支援ノート（No.105）で、いわゆる「標準的な支援」に則って行われていることの現実、壁で仕切ることであったり、機器を使って耳を塞ぐことであったり、必要以上に言葉かけを減らしたり、他者との関わりを断つことなどであると書きました。その結果、多くの方が生活を剥奪されています。仕切られた壁の中で「ひとりで自立してできる課題を行う」ことを研修では丁寧な写真付き資料を用意して推奨しているわけですが、作業の中身は拷問のような意味のないものです。ある人は、納品することのないボールペンを組み立てては分解するということを繰り返すように支援者から言われ、10年間もその通りに毎日作業しています。ある人は見なくてもできるようになってしまったパズルを引き出しから取り出して、何百回目かわからない「自立課題としてのパズル」をやっています。ある人は、紙と鉛筆を与えられ、何かの商品名や電車の名前を毎日書いています。意図的ではないかもしれませんが、それをやることでジュースやコーヒーを飲めるという風に条件付けられ、あるいは帰宅できると条件付けられるなどして、そのためだけに「自立課題」を繰り返しているのです。当該研修で学んだ支援者が、良かれと思って行う実践（作業）のおかげで、こうやって、貴重な日中の時間をただひたすらに経過させていく毎日を繰り返している人がたくさんいるのです。

当該研修における支援のアイデア、即ち「場所の視点」により設定されたブースのような一人部屋にいる彼らは、死んだ空間の利用者です。彼らは、暗くも明るくもない、よそよそしい「不関空間」とでもいうべき「場所」の中にいます。人との関わり合いを豊かにしていく機会を奪われています。このような空間においては、本質的に新しいことは何も起きません。新しさとは、予感から余韻に流れる時間性の中で感受されるもの（中井久夫）です。真剣に現場をやっている援助者は、このような新しい体験流入のない環境が、「ところを痩せ細らせる」のだということを知っています。しかし、そのようなところある援助者さえも、推奨される「標準的支援」にあるような、手順書・マニュアルに沿った支援という名の作業（ルーチンワーク）を繰り返しはじめると、やがてはそこに没頭していくのです。数時間という勤務時間内だけを思えば、研修で教わったことを解釈し、エントロピーを0に近づけていったほうが、瞬間的には楽だからです。そして、支援目的のことなどを考えるのは、ばかばかしいことだと学習していきます。

研修を実施する都道府県や地方公共団体は、こういった現実を踏まえて、研修内容の抜本的改革を行う義務があります。換言すれば、今行われている研修の多くは、この副作用

に拍車をかけるような研修でしかないと言えます。これをそのまま放置し、垂れ流し的にやり続けているのは、組織的で計画的な虐待だと思います。

- 時の厚みを感じられるように

ところで、このような悲惨な研修の効果測定を書き続けていると、自分のところも痩せてきて、落ち込んでしまいそうなので、ここから先は、少しは勉強になることを書きたいと思います。今回のテーマは「感覚」についてですから、その話題を書きます。

障害者であろうがなかろうが、ひとは比較的高度な（人間らしい）行動をするにあたって、その中枢神経を使って行動計画を立てています。この計画は、感覚情報や記憶に基づきます。記憶は過去のデータであり、感覚は徴候（ちょっと先）のデータです。飛行機の計器板にある速度計の中には、徴候を読んで少し先の予想速度を表示するものがあるようですが、鋭敏さを求められる乗り物ゆえに必要なのでしょう。人間も同様で、多少は先案じしていないと、取り返しのつかない事故に遭います。かといって、先案じばかりして意識性をひたすら高めていたら、やがて天井が抜け（限界を超え）てしまい、壊乱恐慌状態になってしまいます。感覚過敏の末路です。

先案じの不安に怖れている相手がいたら、それは「時進み」状態です。現在地点から先にある、細かな変化のみをひろって近未来の傾向予測をし、それに即応して動くのみで、過去の経験を参照しません。だから、とても過敏で振幅が大きくなり、不安定なのです。そんな彼を見たら、援助者は「彼は、過去の経験を参照しないリアルタイムの完全予測という無理なことをしようとしているな」と気付く必要があります。不安・恐怖がこの傾向を賦活します。この状態においては、過敏が極限に達しますから、ホワイト・ノイズや自分の心音や呼吸音までもが身体を反応させる刺激物として入ってしまい、パニックを起こします。ひとが、ちょっとした刺激に反応して爆発するのはこんな時です。こんな時、援助者が「本当は大丈夫なんだ」と念じつつ、さり気なく「それって、ちょっと前にもあったあれと同じだね。あの時はこうやって切り抜けた」と、やや「時遅れ」の態度をとり、相手の孤立無援感を減少させると、刺激に圧倒される感覚を減圧することができ、替わって、過去の経験から来る自信が出張ってきます。これが感覚過敏対策の要点です。

一方で、ひたすらパターン化した行動に固執し、新しいエピソードの徴候入力を遮断し、自滅していく人もいます。パターン化は、過去のデータに基づいたものですから、「時遅れ」状態です。これを延々繰り返すと、こころの新陳代謝が止まります。人のこころは、自らの中に時間を抱え込んでいますから、これは、その人の時間を止めるが如き行為です。この状態を良しとするのは、休息を必要としている時のみです。まずは、そのことに援助者が気づく必要があります。記憶のみに依拠した「時遅れ」状態は、徴候を無視しています。人生を豊かにするような変化、新たな場所・ステージでの新たな経験に胸をときめかせるような瑞々しい感覚があまりも不足しています。この状態が続くことは、こころが痩せて行くのでよろしくありません。これは、一種の感覚鈍麻です。

疲労回復の必要があって「時遅れ」の状態になっているのであれば、休めるように援助をします。しかし、パターンへ固執しているひとは、多くの場合、そこからの脱出を必要としていることが多いように思います。こういう場合、電車で例えれば、上手にポイントを切り替えてあげるような援助が必要です。そうしないと、彼の意識は、周囲との一体感

がある時間的な厚みを感じる機会のないままになってしまいます。先ほど書いた、ところが痩せていく状態です。これは、一見「現在にこだわっている」ように見えますが、実は「現在がない」状態なのです。その生活は、現実には時間的空間的な厚みを与えず、大きな射程の時間的眺望の中に自分の人生を重ねることもありません。

現在とは、予感がかろやかに翻り余韻となって去る地点のことです。その余韻はふたたび予感に参与し、ここに小さな円環が作られます。現実には恒常性を代表するのであって、時の流れをしばしば忘れさせ、時にはっと、ある時間が流れたという形で、事後的に気づかせます。この時、ひとは時の厚みを感じます。(中井久夫)

僕らの援助が、相手から時の厚みと現在を奪うようなものであってはいけません。しかし、施設や病院においては、しばしばそのようなことが起こります。そういう前提で、援助にあたる必要があるのです。

● 感覚刺激についての詳説

支援者養成研修における「感覚刺激」についての説明が、あまりにも貧相なので、以下に改めます。

あるひとが、紙に書いてある言葉を声に出して読むと、声に出した言語は耳から側頭葉にある側頭連合野に入ります。記憶も同様に側頭連合野に入り、耳から入った感覚刺激と統合されます。眼で見て読んだ文字というカタチを持つ感覚刺激は、眼から後頭葉の視覚野を経て頭頂連合野に入ります。また、空間認知や自身の身体意識に関する感覚刺激も、頭頂葉にある頭頂連合野に入り統合されます。側頭連合野や頭頂連合野にて受け取られて統合された感覚刺激は、最終的には前頭葉にある前頭連合野に入り統合されます。このようにして、感覚器から入った刺激群は、瞬時に統合されながら前頭連合野に到達し、そこでさらに連合します。前頭連合野は前頭前野とも呼ばれています。ここで連合された感覚刺激群は、前頭前野が「思考」「判断」「注意」「企画」「創造」「計画」「自己抑制」「コミュニケーション」といった、人間独自の精神活動を起こすきっかけになります。つまり、連合された感覚刺激は、最終的に何らかの人間らしい動作を起こすような指令に変換され、運動神経を伝い、再び末梢に向かうのです。そして、最終的には「動作」という具体的なカタチとなって表現されます。この時点で「意識」という自己の動作を見つめるものが瞬間発生し、「感情」も沸き起こります。こうやって、感覚刺激は末梢神経から中枢神経を瞬時に駆け巡り、前頭前野に集約された後に、生物学的・社会的な意味を見だし、それを具体化すべく末梢へと帰って行くのです。

● 強度行動障害発生の機序一例

そう考えると、感覚刺激を心身がうまく取り扱いきれず、アウトプットが大きく乱れてしまうことが、厚生労働省の言う強度行動障害という状態像なのだ解釈できそうです。確かに、インプットからアウトプットへと向かう過程が失調している当人の心身を見ると「しんどいよなあ」と思います。そこで、この状況において、援助者が何をするかということが問題になります。勘違いしてほしくないのは、この場合、悪いのは感覚刺激そのものではないということです。感覚刺激の適切な取り扱い方を身体が覚え

ていないこと（ないしは、忘れてしまったこと）が問題なのです。従って、本人に生きていく希望をもってもらいたいというのであれば、感覚刺激を適切に取り扱い、本人なりに「思考」「判断」「注意」「企画」「創造」「計画」「自己抑制」「コミュニケーション」できるようにする援助こそが、本人の「いのち」に必要なことだと言えます。

先に書いた「意識や感情の発生」は、その人の動作が始まってから0.5秒経過した後起こります。つまり、人間は意識して動くのではなく、動いたことを意識するのです。（Benjamin Libet）現場で仕事をしていない人は、この0.5秒というタイムラグが信じられないかもしれません。しかし、現場にどっぷり浸かったことのある人は、この0.5秒というタイムラグについて、強く納得するでしょう。

例えば、僕が若い頃にスッタモンダした文太郎は、食事を食べようとする、食卓上にある茶碗や皿を瞬時に払い、美味しそうなお飯とおかずを全部台無しにしていました。そして、そのことに誰よりも強いショックを受けているのが文太郎でした。自分は食べたくてしかたないのに、自分の腕は待ち焦がれたご飯とおかずを全て払いのけてしまうのだから、こんなショックなことはありません。文太郎がご飯とおかずを払いのける動作は超速です。文太郎が「食べよう」と意識する0.5秒前に、文太郎の腕は誤作動を起こし、大好物たちが宙を舞うわけです。ショックを受けて暴れ出す本人のつらさを思うと、僕も切なくなってきます。こんなことは、入力から出力に至る過程や動作に失調を起こすに至った青年たちの援助を必死でやったことのある現場人であれば、強く共感できるはずです。

やるせない気分で文太郎の食事に付き合った僕は、食卓に乗っている食事を目にして青ざめている文太郎の背中を見て、「一緒に食べるぞ」と一声かけて、二人羽織のようにして、文太郎の背後につきました。文太郎が僕の動作に息を合わせやすいように、文太郎の意識下に潜り込むかのようにして、フワッと身を重ねようと思いながら、食事の援助をしました。二人羽織スタイルにしたのは、僕と文太郎が同じ方向を向くことを意味します。物理的に文太郎と僕が正面から向き合わないことで二者関係（＝対立関係）のドツボにはまらず、脱中心化することを目指しているのです。

もし、文太郎がひとりで上手く食事をとるという設定だとしたら、文太郎は自分で自分の0.5秒先を読まなければいけなくなります。これは余裕のない彼にとって相当な緊張を強いられます。また、その緊張が彼の意識性を過剰に高めてしまい、食事の時間を迎える前に、予期不安からのパニックを起こして崩壊するでしょう。だから僕が文太郎の代わりに0.5秒先をよむことで、文太郎が背負っている重荷を半分引き受けようという密着作戦です。

この作戦、最初の内はイーブンでした。しかし、徐々に息が合ってきて、僕と文太郎の勝率が上がってきます。断っておきますが、僕の勝率が上がって文太郎の勝率が下がるということはあり得ません。常に、僕の勝率と文太郎の勝率はシンクロします。そうならない場合は、息も合っておらず、何かが違っているのです。ある程度息が合ってきたら、物理的に身を重ねることはやめ、僕の分身を文太郎のところへ派遣して、その役をやってもらいます。もちろん、分身というのは僕の妄想で、物理的には存在していませんが、この非科学的方法は不思議と効果があります。これも徹底的に現場をやっ

たことのある援助者であれば共感できるはずですが、もちろん、科学的根拠はゼロ。オカルト的援助ですが、本人がそれで上手く行けば何でもいいのです。終わり良ければ全てよしと言うのではないですか。

● 廃用症候群を生み出す支援

僕は、「入力を絞って出力のブレを制御するという緊急一時対応」を火事場の火消しに過ぎないと思っています。これは単純に鎮火させるところまでの話ですから、物理的に条件が整っていさえすれば、誰にでもできます。実際、日本全国津々浦々に施設を見て回れば、とても多くの施設で実施されているものです。従って、今さら多額の公費を投入して「入力を絞って出力のブレを制御するという緊急一時対応」中心の研修をする必要はないと思います。ただ、残念ながら、その現場にあるのは、良くて鎮火後の火事場に漂う悲壮感止まりです。悪いと、鎮火したまま放置されて、廃用症候群に含まれるようになってしまったひとの姿が見られます。廃用が中枢神経系に現れるとき、それはどういう形をとるのでしょうか。あまりにも刺激のない生活を送らされてしまった結果、末梢から中枢まで、すっかり錆び付いてしまったひとの姿を以下にイメージしてみたいと思います。

例えば、前頭連合野がうまく機能しなくなると、「考え方を状況に合わせて円滑に切り替えられない」「習慣的な反応や考え方に抑制をかけなければいけない時でも、これを繰り返してしまう（保続）」「時間に沿った行動ができない」などの障害が見られます。また、側頭連合野がうまく機能しなくなると、「物が見えていても、それが何だかわからない」「知っている人や有名人の顔を見ても、それが誰であるのか特定できない」などの障害が現れます。頭頂連合野がうまく機能しないと、「物が見えているのに、それに触れられるように手を伸ばすことができない」「3次元の物体が平面に見える」「通い慣れた家やお店までの道順が分からなくなる」「半側空間無視」などの障害が現れます。末梢神経が錆び付いてしまえば、立位や座位を保てない、歩けない、寝られない、眠れない、食べられない、排泄できないなど、総じて意識と動作水準は低下して、考えて動くという合目的行動がとれなくなってくるわけです。これは、「いのち」が芽吹いて、心身と生活が再建された姿ではありません。

以上のようなことから、『強度行動障害支援者養成研修』で受講者が重点的に学ぶべきは、火消しの部分よりも、むしろ生活の再建過程についてであると言えます。当然、生活の再建とは強度行動障害と言われるようになる前の状態に戻るのではなく、再建後に同じ轍を踏みにくくなることに決まっているのです。

● 重犯罪的支援

特定の感覚刺激をとらえる「意識」というものは、前頭連合野で感覚が統合された時に立ち現れます。翻って、僕らはよく情報の整理だとか、混乱を鎮めるという名目で、相手が受け取る刺激を少なくしたり、遮断したりします。本来これは、「調節する」という意味合いで暫定的に使うのでなければ、重犯罪にあたると僕は思います。また、混乱が静まった直後に、可能な限り速やかに、一般社会に近い刺激のある状態に戻すことをしないのも重犯罪にあたると思います。パーテーションで仕切ったり、ノイズキャンセラーで耳を塞いだり、個室に入れて外界との接触頻度を減少させたりすることは、最小

限にすべきです。やらずに済むのであればやらないというのが僕のポリシーです。なぜなら、刺激の入力を絞り続けることで、「感覚刺激を連合野に集めて統合し、意味ある情報として認知する」という、人の意識を支える脳の動きを錆び付かせることになるからです。

錆び付きと廃用の実態は、「身体の機能は、使われなければ脱落していく」という定式の通りです。さしあたって前進するよい展望がないのに、漫然とこれ続けることについての犯罪性を現場も有識者も、まずは認めるべきです。「標準的」という虚像に合わせた感覚刺激の制限や遮断というアプローチを、個々にある「神経発達症」における平均からの偏差を確認することなく、漫然と続けるということは、連合野に入った刺激群が統合されたときに立ち現れる意識をゆがませ、暮らしを創造するのに大切な感情や、それに基づく判断をも狂わせます。これでは、「まず害するなかれ」という援助の鉄則から大きく外れることになります。これは、今日誰もが倫理的に許されないとして非難するようになった「アルバイト坊やの実験」と同程度か、それ以上に侵襲性があることだと言わざるをえません。

- まともな援助者は、30年後のことを考える

さしあたって前進するよい展望がないのに、漫然と対症療法を続けると、30年後には廃用症候群や死に至るということを想像できないような支援者は、相手を害するだけの存在です。方法論はさておき、そういう存在になることを全力で避けながら日々の仕事に打ち込むのが、職業援助者として最低限の姿です。感覚刺激を減らすことのみで腐心し、自らの働きかけを最小限にしつつ安全地帯に逃げ込んだ挙げ句、相手の時間をのっぺらぼうにしていることに気付かず、無自覚にひとの人生を台無しにするリスクこそ、僕らが必死で避けるべきことでしょう。

満身創痍となった当人の身体に「いのち」を吹き込む気があるのなら、鎮火後の再建こそが援助の本質になるはずですが、具体的にすべきことは、感覚刺激の健全な使い方を学習しないしは再学習することです。

脳の動きを反対側から眺めてみれば、それはこころの働きです。こころは自らの中に時間をも抱え込んでいます。したがって、こころの働きを止めれば、その中にある時間をも止めてしまうと言えるかもしれません。これを読んだ皆さんは、こんなことが起きたらさぞかしつらかろうと思うでしょうが、福祉施設の現場では、こんなことはざらにあります。これに対して、現実を認めつつ、開き直らず、創意工夫をもって立ち向かうことこそが、援助者の誇りと栄光なのです。

- ひとの意識を支えるもの

ひとの意識を支えるものは、「三叉神経運動枝の支配する筋の運動感覚」「視覚」「聴覚」「足裏の触覚」「痛覚」「筋肉運動覚」を主体とする身体装置です。意識と身体装置は、互いに支えつつ支えられる関係にあります。これらの感覚を奪っていくと、徐々に意識を支えることができなくなり、同時に身体も支えられなくなるのです。

例) 知的発達症のユタカは、40歳代のころ、時々特定の誰かを叩いてしまうということ

がありました。気分が悪い時だけでなく、楽しくなった時もそうでした。自己の身体を制御する力が育つ過程に障害があったのです。これは、裏を返せば、それに気づき、発達への援助をする人がいなかったことが障害だったとすることができます。しかし、ユタカの境遇に対して、特にその育ちに注目する支援者はいませんでした。そんな支援者は、「ユタカの日や耳に入る感覚刺激を絞る」という環境調整を行いました。この根拠は、単純なS-R理論や、三項随伴性理論でした。そして、S-R理論も三項随伴性理論も、支援者が直接見ている範囲内の情報のみで組み立てられていました。繰り返しになりますが、当時の支援者は、ユタカ的生活歴など興味がないという状態です。その程度の情報や共感の水準でユタカの今を説明する事は、理論的に不可能です。本当に妥当性のある行動分析をしたいのであれば、ユタカが生まれてから今に至るまでの生育歴・生活歴を詳細に調べ、刺激と反応の連鎖分析における起点を0歳時点に置く必要があると思います。それでも足りませんから、そこは経験に裏打ちされた想像によって仮説をもち、埋めていくしかありません。

この説明を聞いて「高原が冗談を言っている」と思ったかたは、残念ながら支援者という職業には向いていません。早々に職を辞したほうがいいでしょう。刺激と反応という機序のみでユタカの行動を分析するというのであれば、その位の覚悟をもってすべきであり、「本当にそんなことができるのか？」という疑問を常に持って行動の分析にあたる必要があります。そういったアンダーステートメントの下に行動を分析し、その結果を参考として用いるべきだと言いたいのです。もともと、S-R理論や三項随伴性理論の系譜にある行動療法の限界として、その理論背景にフロイトやピアジェが提唱した発達論のような、一生涯をつらぬく大きな物語がないということは、理性的に行動療法を使う人にとって周知の事実です。そして、そのことをよく理解してこれを使う者のみが、実践において成果を出せるものだという常識があります。行動療法に限らず、あらゆる手法には、謙虚さや限界づけが不可欠なのです。

さて、ユタカその後について触れたいと思います。彼の行動は、支援者によって、極めて短い時空間的射程内の分析を受けました。そこから割り出された支援計画の実践として、ユタカはまず、ひととの関わり合いという刺激を奪われました。続いて、日常生活動作の機会を奪われました。これも、「混乱させる刺激を減らすため」という最もらしい理由がついていましたが、実際にどこまでの刺激がユタカを支えていて、どこからの刺激がユタカを混乱させるのかについての精密な確認はありませんでした。彼から刺激を奪取した時の根拠は、支援者養成研修や厚生労働省の報告書によって教えられるような「標準的な支援」です。ユタカ的生活は、無理して言えばシンプル、普通に考えれば殺風景で目鼻のない環境に変化させられました。

暮らしがのっぺらぼうになると、そのひとの意識は薄れていきます。そうになると、通常ひとは、薄れて行く意識を取り戻そうとして必死になります。生体としての防衛であり、異常な環境に対する正常な反応だとも言えます。しかし、支援者がその必死さに対してまともな解釈と善い方向付けをしないと、必死さは痛覚や筋肉運動覚のみに向かうこととなります。ユタカもそうでした。生活を意味づける刺激や変化をすっかり奪われ、目鼻のつかない生活が続いたあげく、意識性を高めようとして必死の防衛的行動（多くの場合、これを行動障害と呼びます）をとるようになりました。それに対して支援者は、ユタカなり

の必死さであるとは受け取らず、狂気としてこれを解釈しました。そして、支援者側の独断でユタカは精神科への入院を余儀なくされました。

入院後のユタカは、更に刺激を奪われ、意識が薄れます。彼は、それに抵抗するかのようになり、必死に意識性を高めようとして、痛覚と筋肉運動覚から刺激を入れるための破滅的行動を繰り返します。それに対して更に薬が増え、その意識はますます薄れて行きます。彼はさらにそれに抵抗するかのようになり、意識性を高めるための行動に出ます。連日連夜に渡って病院の扉を蹴飛ばす、奇声を発する、骨折するほど自傷や破壊行為をするなどの凄まじい行動を繰り返したのです。単純で浅いS-R理論による間違っただけの見立てをされたユタカは、保護室に入れられて、意味ある刺激をすっかり奪われます。しかし、そこでもユタカは、その意識性を取り戻そうと、フラフラになりながらも同じことを繰り返します。これが、彼のとった凄まじい行動の意味です。しかし、その意味を感じ取れず、彼の意識を保つような働きかけができない医療従事者や支援者たちには為すすべもなく、空しく薬だけが増えていきます。これを繰り返すうちに、やがてユタカは「歩くこと」「立つこと」などの基本動作をする力を奪われ、その手続き記憶をも消去された廃用状態となりました。皮肉にも、その状態を「落ちついた」と評価され、ユタカは退院することになりました。これが、的外れな福祉と的外れな医療とが生み出す死の行進曲です。しかし、的外れで済まされる問題ではありません。ユタカの人生は支援者や医療従事者たちによって半ば台無しにされたのです。このことについて、誰が責任をとるといえるのでしょうか。

● 感覚についてのまとめ

強度行動障害支援者養成研修において取り扱われる「感覚」についてのとらえかたは、要するに「苦手」「好き」「必要」の単純な三分割です。しかし実際には、それらの刺激を、中枢神経を含む身体がどう扱うか、どのようにして扱えるようになっていくのか、ということについて、時間的な射程を深くとって考え援助しない限り、微分回路に入ったわずかな刺激が鋭く不安定な反応を生むような状態の苦しみから彼らが逃れることはできません。僕たちは、「ひとは刺激に支えられて生きている」(滝川一廣)という事実をもう一度見つめ直し、生活再建に向けての策を練らなければいけません。

前頭連合野が上手く機能しない状態をひどく単純に表現してしまうと、「脳の前後軸(前頭前野が司る実行機能)における機能的分離」という状態だと思います。実際には、「考え方を状況に合わせて円滑に切り替えられない」「習慣的な反応や考え方に抑制をかけなければいけない時でもこれを繰り返してしまう(保続)」「時間に沿った行動ができない」などの様々な不自由が発生します。この不自由に対するハビリテーションやリハビリテーションは、生活そのものであると言えます。生活即リハビリなのです。そういう視座を持った援助について、僕たちはもっと深く考えるべきだと思います。

もうひとつ考えるべきは、「意識」「感情」という、ひとのところに発達したものについてです。「意識」「感情」は、コンピューターにはないものです。なぜコンピューターがこれを持ってないのかというと、「意識は創発であり、前もって貯蔵されているものではなく、そのときそのときに出現するもの」(Brown, Jason)だからです。6Pにも書いたように、意識は自分の動作が起こった0.5秒後にこれを認知します。(Benjamin Libet) この事実は、人間の意志とは何なのかということについて考えるときに、避けて通れないことです。

このような機序についても、当該研修では全く触れられていません。研修で伝えられているような浅い考えのみで、感覚にまつわる障害への支援方略を練ろうというのだから、やっつけ仕事もいいところです。このことは、厚生労働省が令和5年3月に出した『強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書』についても言えることであり、これを支援者が受けて唯々諾々と仕事（というか作業）をしたところで、ユタカのような人が減ることはないだろうというのが僕の本音です。

● 援助の本質を求めて

先ほども書いたように、ひとの意識は創発です。今のところ、コンピューターは、ひとが前頭連合野で統合した感覚刺激を前頭前野（最高中枢）から末梢に向けての指示と実行に移した瞬間に、全体として機能すべく発現する「意識」というものを持つことはできません。それ故に、ひとのやることはコンピューターよりも遙かに意外性があります。そして、人間どうしのやり取りは、そこに発露する様々な意味を相互に推し量りながら発達していきます。ところが、相手がコンピューターだと、受け手のひとは「計算機がはじき出した情報なのね」という事実に基づいた対応をするので、飛躍がおこりません。従ってそこには、ひとの暮らしから醸し出される豊潤さが生まれる余地はないのです。

AIは、作曲することもできるし詩を書くこともできます。しかし、あるAI研究者は、そのようなソフトを作らないと言い切ります。曰く、「人間が詩を書くからこそ意味があるので、AIやロボットが詩を書いたとしても、そこに意味はない」と…。

作品というものは、作者という肉体を持った人間の生活が積み重なってできた背景感情とセットにならないと、その作品（感覚刺激）を取り込んだ人に、意味ある意識や感情を抱かせないということなのでしょう。これについては、援助活動という、相手のところにアクセスする行為と通底しているものだと思います。それは、泥臭かったり、予想もしないところからの影響を受けた豊穡さを伴っていたり、魔が差したとしか言い様がない迷いがあったり、第六感に導かれたものだったりという、意外性を伴っています。ところが、時々僕らはそのことを忘れます。

ひとがひとに関わる形での血の通った対人援助が担うべきものの本質をコンピューターやAIはつかめません。コンピューターやAIに認知できるのは、一部の記号化可能で抽象化された情報のみです。従って、抽象化できない援助、つまり援助の本質部分については、ひとがやるしかありません。

援助者がひととして行う援助は、入れ子思考を基本にしています。つまり、相手の気持ちを自分に取り込んで想像しながらやりとりをするのです。援助者が「感覚」という情報の処理を援助するにあたって、単に目に見える形の情報に単純化したり、感覚入力を絞り込んだりできるというだけでは、そのスキルとして不十分です。本当に必要なスキルは、対人の場を統合維持しながら、やり取りすることです。これはスペシャルなことではなく、ひととして極めて平凡なスキルです。そして、お互いにこれをし合えるのが成熟したコミュニケーションであり、目指すべきカタチでもあり、多くのひとが求めて止まないものなのです。

確かに、『強度行動障害支援者養成研修』で想定しているような相手は、これが苦手であることが多いのかもしれませんが。だからと言って、当該研修内容のように、あえて深まらないようにしているかのような枠組みを作り、「標準的支援」の実行を迫るが如きものであってはいけません。相手はこころを持ったひとなのですから。

僕たちは、相手が援助者の気持ちを取り込む過程をも援助しながら、相手の気持ちをも自分（援助者）に取り込むという、けっこう面白いことをやっています。そのスキルを身につけられれば、上級者だと言えます。加えて、相手の伸びしろを常に推測しながら関わるのだから、さらに複雑です。

相手の状態は、「器質性」「心因性」「内因性」という、少なくともこの三つの要素が絡み合っただけでカタチになったものです。これをどのようにして、本人が幸せを感じるように方向づけて行くかが、僕らの悩みどころになります。援助者には、相手の生活の方向性を定める任務があります。当然、これは相手との共同作業で行わなければ意味がありません。これが難しく、最も面白いところなわけですが、先に書いたように、対人の場を統合維持しながら行うことが肝要です。

ただし、いくら難しいと言っても、これは日常そのものなのです。親が子に対して、あるいは、先輩が後輩に対して、世間という大海の泳ぎ方を教えることと、その本質は同じです。この平凡な複雑系は、デジタルに区切りきれないものであり、そこに携わることこそが僕らの誇りと栄光になるのです。

そう考えた時に、この『強度行動障害支援者養成研修』や『強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書』にあるような内容というものは、職員をコンピューター化するような内容だなど、僕は感じています。また、今回取り上げた「感覚」という項目一つとっても、ひとのこころや脳といった複雑系についての考察が一般常識レベルに到達しておらず、うそ寒い気分になります。

● 最後に ～支え合う仲間をつくる援助を求めて～

令和6年2月14日より小欄にて、都道府県で加算対象の研修として行われている『強度行動障害支援者養成研修』に対する提案を5回連続で書いてきました。「いつまで続くのか？」と思われる人もいたかとは思いますが、今回で一区切りとします。今回も、紙幅を大幅に超えましたが、いよいよそのまとめに入ります。

小欄で取り上げている公の研修では触れられていませんが、ソーシャルワーカーの対人援助技術における有名な7原則があります。バイスティックというアメリカ人が提唱したもので、「個別化」「意図的な感情表出」「統制された情緒的関与」「受容」「非審判的態度」「自己決定」「秘密保持」と並びます。アメリカ社会の事情はさておき、僕は、この7原則について、日本に直輸入して使うのは無理があるのではないかという疑念を常々抱いています。拙著を読んでいただければおわかりになるかと思いますが、僕の場合は、7原則適用対象外の実践がとても多いし、そもそも、この7原則を文字通り「原則」として実践するという点については、経験的に諦めています。それどころか、現場を知れば知るほど、バイスティックさんに対する不信が積もってくる始末です。しかし、これはバイスティックさんが悪いのではなく、そもそも援助活動というものが文化依存的である

という動かしがたい事実を無視して日本に直輸入した日本の専門家が悪いのです。この様相を見て、140年前（明治10年代後半）の日本で起きていた鹿鳴館時代の歪みを思い出してしまうのは、僕だけでしょうか。

ところで、この7原則に共通しているのは、相手の対象化です。スマートな表現の裏に、「僕とあなたは別のひとです」という態度と「それ故にあなたの自己責任で僕の助言を使ってください」という支援者側のずる賢い防衛が見え隠れしています。また、相手を徹底的に対象化しているところが、妙に自然科学ぶっています。しかし、その内実は似非科学でしかなく、科学的方法の要件を満たしておらず、それが現場との間に乖離を起こさせているのです。この乖離を簡単にまとめてしまえば、教科書通りにはいかないという事実そのものなのです。そして、「強度行動障害支援者養成研修」や「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書」（2023/3/30 厚生労働省）は、障害福祉鹿鳴館時代の落とし子であることを強く主張しておきたいと思います。

この落とし子もまた、教科書通りに行かない事実を無視してこだわった結果、たくさんのひとの人生を捻じ曲げてしまいました。人生を捻じ曲げられた人たちの声を誰がどうやって聴き取り、反省し、今後に生かすつもりなののでしょうか。

話を元に戻します。バイスティックさんの直輸入に見切りをつけた僕は、次第に自分なりのポリシーを持つようになりました。これは僕自身の個人倫理につながっていくものです。もちろん、個人倫理ですから、ひとにお勧めするつもりは毛頭ありません。しかし、とても平凡で、基本的には無害なものなので、ご紹介したいと思います。

第一に、相手を理解するよりも先に、相手から信用してもらえようという態度で接すること。理解はついに信におよばない。

第二に、相手の人生を豊かにしないであろうアプローチはかけない。相手に有益でない侵襲を行わない。

第三に、功名心に踊らされない。（二兎を追う者は一兎をも得ず）

第四に、さしあたり、前進する良い展望のない働きかけはしない。「まず害するなかれ」

第五に、科学の無節操さをよく知ることこそが科学的態度である。今の科学で証明されていないことであっても、よいと思われることは、有害性が予見されない限りやってみる。やってみてダメだったら、さっさとやめる。

第六に、目的や願望から状況を解釈しない。経験に照らし合わせて推論を検証する。そして、その上で新たな推論を構築する。

第七に、自分にできないことを相手に要求しない。

第八に、相手を安く見積もらない。例えば知能検査の結果は、「最低でもこのくらいの能力はあるのだ」と思いながら解釈する。

第九に、「障害者」とは一次的かつ部分的存在であるはずだ。頭のとっぺんからつま先まで障害者であるひとはいない。「本職障害者」をつくらないような援助をこころがける。

これは、別の業界にいる人が「高度の平凡性」と呼び、実践していたことを僕が勝手に障害福祉版に書き換えたものです。どれも平凡なことであり、取り付きやすいものです。バイスティックさんの原則を日本でやろうとは思いますが、「高度の平凡性」なら僕にも

できそうな気がします。

援助技術というのは、枝葉末節の工夫です。あるひとへの援助に関する工夫は、相手を対象化して行えるものではありません。相手との間に、幼児における自他の未分化とは明らかに違う、洗練された自他融合の状態、予感と余韻と快い予想外とが一体となった、生き生きとした対人的現実感と充実感をもつことを目指すものです。また、自立ということは、人々のつながりの網に信頼して依拠できるということと表裏の関係であると考えます。全て、相互扶助の味わいがあります。よく言われるパーソンセンタード・アプローチとは、この自他融合の状態を対象化したものだと僕は思います。

ところが、強度行動障害支援者養成研修においては、研修全体を通して、相互援助を目指す意識が皆無で、極めて残念に思います。研修の講師は、強度行動障害とされるひとの胸中に、身を焦がすような一体化願望があることをほとんど無視しているかのようです。これは、荒れた行動の原因を情報入力過程やその統合処理過程、言語概念の発達遅滞における感覚刺激の減圧処理能力障害などの表層的なものであると決めつけた結果でしょう。そう決めつけて、支援者が安心したいだけなのです。

このように、ろくな洞察もなく標準的支援とやらを振り回し、ひとの意識を支えている感覚刺激を操作してしまうと、関係性の発達を梃子にした身体の自己コントロール能力や社会性の発達が歪み、乃至は遅れ、主体性が育つ機会を潰してしまいます。そのことは結果的に、そのひとが親密な場と時間を体験する機会をも剥奪します。親密な場と時間を持つ機会を奪われたひとは、次第に生活の根を掘りくずされていきます。その結果、その後の対人関係や対社会関係は荒廃していき、著しく貧相なものになってしまいます。これは、幸せとは程遠い状況です。状況は認知を変えます。ところが痩せた状態になったとき、不安という黒子が暗躍し、ホラー映画を見た後に易々とは眠れないのと同じ精神状態が常態化します。そうなると、感覚器から入ってくる刺激は、周囲と共有できるようなカタチに認識されず、こころに恐慌を起こさせる原因になります。

2004年の研究報告から現在まで、20年間もの間十分な検証も受けずに唱えられている支援方法としての「構造化・視覚支援・薬物療法」は、マニュアル化できる方便に過ぎません。僕らが求めている神髄は、親密な場と時間を取り戻す（つくる）ことなのです。

障害福祉の対象範囲は対人関係の世界です。方便としての支援方法が何であれ、親密な場と時間を取り戻す（つくる）ことができれば、「社会性の障害」「コミュニケーションの障害」「想像力（こだわり）の障害」「感覚の障害」といったものは、かさぶたが剥がれるように脱落するか、意識の辺縁へと退場していくことが多いものです。

幸せを感じる人生の物語というものは、普通の生活を取り戻すという地味で平凡な希いから始まります。そしてその過程は、援助者も被援助者もWeモードになり、支えつつ支えられながら進む共同作業というカタチとなって現出します。福祉の値打ちは、このような共同作業を守ることとあり、商業主義や官僚主義の対極にあるものです。

国の施策や現場の実践が、このことを真に理解しているのかどうか問われています。

令和6年6月15日 高原浩

※ 支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されおり、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的発達症を含む神経発達症や精神疾患のあるかたたちが、実践的な環境で企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な経験を支援者と利用者で分かち合いながら行うことを目指します。

基礎訓練段階からのトレーニングが必要な方にも利用しやすい就労移行支援事業所です。療育的な視点で再評価し、個々にボトルネックになる課題を明確にすることで、具体的な傾向と対策を共有しながら就職に向けての援助を行います。

就職後に成長できる適職場に就けるような余裕を作ることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】 お問い合わせください

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままだけに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることが防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】 見学可 実習については応相談

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続

支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域のかたたちといっしょに活動するプログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて ([ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です](#))

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます)

社会適応の障害になり得る発達の凸凹や遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えたときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室 (PC技能訓練)

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。

③ 「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

スマホ依存やゲーム依存を予防する学習や、口腔ケアなどの健康管理に関する学習などを普段とは違った雰囲気の中で、楽しく学ぶことができます。

⑤“自立講座”“OBとの交流会”等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内（全て、全国の書店やインターネットから購入できます）

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版（3刷）好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

***全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。**

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルージョンとインクルージョン教育』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルージョン教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中（下記リンクは、案内のみです）

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルージョン教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaItY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

- 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー
- 令和6年6月15日 7月27日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会
児童・成人部門 職員研修
- 板橋区自立支援協議会 高次脳機能障がい部会

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下の
お問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年6月15日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩